

〔新刊紹介〕川邊透・前畑真実 著, 平井規央 監修『昆虫変態図鑑』(ポプラ社) / 桃山鈴子 作, 井上大成 解説・監修『へんしん—すがたをかえるイモムシ』(福音館書店)

前藤 薫

昨年は昆虫の変態をテーマにした新刊が相次いで出版された。幼虫から成虫へと大胆に姿をかえる変態こそが、翅の獲得とあわせて、昆虫を繁栄に導いた秘訣なのだ。昆虫学では教わる。だが、たいていの昆虫図鑑には成虫の姿だけが載っていて、別に用意された幼虫や繭の図鑑と見比べることが多い。

ところが、『昆虫変態図鑑』には、なんと222種もの昆虫の一生が、素晴らしい生態写真と気のきいたイラスト、分かりやすい文章によって紹介されている。現生の28目の昆虫のうち無変態のイシノミ目を含む19目が登場しており、昆虫の全体像がみごとに描かれている。

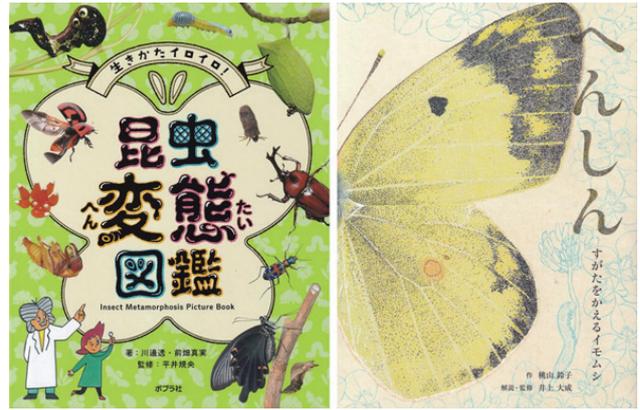
チョウ目だけで100種近くを占めるのは仕方ないだろう。植物を食べるために、その表面にあえて身を晒すという大きなリスクを取って進化したイモムシやケムシの姿は、どれも洗練されていて美しく個性がある。「ドクガ」と名のつくケムシが7種も登場するが、本当に毒をもっていて危険なものと無毒なものが丁寧に解説されているので、有毒なものを含めて身近に感じることができる。

コウチュウ目もさすが多彩な面々がひしめいていて楽しい。ハエ目はやや少なめだが、ハチ目からは3種の寄生バチを含めて主要なメンバーが出揃っている。完全変態群の終わりごろに登場するヘビトンボとラクダムシは、どちらも成虫はよく目にするが、幼虫の姿も頭と胸、腹のプロポーションが成虫にそっくりなことに気づいて驚いた。

不完全変態する昆虫は、トンボ目などの水生昆虫を除けば、親子の姿に大した違いは無いだろうという思い込みは心地よく碎かれる。例えば、ハゴロモの幼虫の装いは、見慣れた成虫の姿からは思いつかない。反対にカイガラムシの幼虫から、雄成虫の姿を想像するのも難しいだろう。

不完全変態群の最後に紹介されるカゲロウ目の変態は奇妙である。水中で生活していた終齢幼虫は脱皮するとまず垂成虫(翅はあるが生殖器は未発達)になり、もう一度脱皮して本当の成虫になる。なんだか無駄なようだが、垂成虫にもきっと何か役割があるのだろう。

昆虫に詳しい「ヘンタイ博士」が、案内役として豆知識を披露してくれるのも本書の魅力である。カゲロウ目のページでは、水生昆虫の多くが春から初夏にかけて羽化するので、川の中の昆虫を観察するには夏よりも、冬の終わりから春先が良いのだと教えてくれる。



昆虫の変態をテーマにしたもう一冊は絵本である。タイトルは『へんしん』。冷静に考えてみると、変態などと難しく構えることはなく、幼虫から成虫へと姿を変えるのだから変身でよいのだ。

この絵本には、モンシロチョウ、ナミアゲハ、ウラギンシジミという3種の蝶が、卵から幼虫、蛹、成虫へと変身する様子がリアルに描かれている。とくに、幼虫から蛹への脱皮や蛹から脱出したばかりの成虫がしわしわの翅を伸ばしてゆく姿が生々しい。翅をもつことには大きなメリットがあるが、そのために羽化したばかりの成虫はとても大きな危険を甘受していることが分かる。どれも身近にみられる蝶ばかりなので、絵本をもって野原に出かけ、実物と見くらべながら楽しむことができそう。カバーのモンキチョウはそうした読者への宿題であろう。

解説のなかで井上大成さんは、ギンイチモンジセサリの終齢幼虫が何も食べずにそのまま脱皮して蛹になってしまうのは無駄に見えるが、なぜだろうと問うている。カゲロウの垂成虫もそうだが、昆虫の世界にはよく分からない不思議なことが、まだまだ沢山ありそう。

井上さんは、これまでも月刊「かがくのとも」の『チョウのふゆごし』『むしとりあそび』『はっばのかくれが』などの絵本の文を執筆されている。定年退職後は絵本作家にでも変身されるのだろうか。

(Kaoru MAETO 兵庫県宝塚市)